

とを教えてください。

続いて、2人目の赤司さんからは、仕事をしながらの消費者としてのごはんの話と北海道胆振東部地震の観点から食の話をしていただいた。実際に社会人として働く中のごはんのお話は、これから社会に出ていく学部生の方々にとっても、新社会人として働いている若手会員の方々にとっても、実際の具体的なごはん事情が聞けるいい機会になったのではないかと思います。また、地震被害への復旧・復興において食はとても重要な位置を占めているというお話をうかがうことができ、同じ地震を経験した岩手でそのような報告を聞くことが出来たことにはとても意味があるのではないかと感じる。

3人目の佐々木さんからは、自身が勤務されている介護施設での利用者の方々へのごはん事情について話していただいた。まずは、施設を利用されている高齢者の方々への日々のごはんについて注意している点を、実際の利用者の方とのやりとりも交えながら紹介していただいた。また、なかなか食べたいものを食べたいように食べることが出来ない利用者の方々に、いかに美味しいと思っごはんで食べてもらえるかの工夫・努力のお話を紹介していただいた。

最後のシンポジストである小林さんからは、心理職として働く中で、クライアントさんの食の支援という視点から話していただいた。実際の現場での事例を通して、食べることと自立の問題について取り扱った面接事例における具体的なアプローチを紹介していただいた。実際に自立を経験している学部生や若手会員の方々にとっても自分の食と重ねて考えることが出来る良い機会になったのではないかと思います。また、心理職を目指している学部生にとっては実際に起こり得るであろう食が関係する事例を聞くことが出来る良い機会になったのではないかと思います。

今回のシンポジウムを通して、改めて“食べること”と“幸せ”の関係を考えてみた。我々誰しもに関係する“食”。それは忙しい毎日の中で時に、後回しになることもあるものかもしれない。しかし、日常の中に少しでも自分なりの“食”の幸せを見つけることができ、それを大切にしていくことが出来れば、それだけで幸せなことなのではないだろうか。

最後に、シンポジウムの開催にあたり、お忙しい中貴重な経験をお話しいただいた4名のシンポジストの方々、並びに質疑応答にて議論を盛り上げてくださったフロアの参加者の方々に、深く感謝申し上げます。

【シンポジストより】

「消費者が喜ぶ食」のために

大坂瑞貴（株式会社サーベイリサーチセンター東北事務所）

生産者の立場から考えた「最高の食」とは、やはり「消費者が喜ぶ食」である。消費者に喜んでもらうため、生産者はよりおいしいものをつくろうと努力している。私の実家では、ウニの加工とホタテの養殖を中心に、水産加工業と養殖業を営んでいる。ウニならば身を傷つけないようスプーンで一つずつすくう、ホタテならば少ない数で大きく育てる、といった消費者に喜んでもらうための努力・工夫に取り組んでいる。生産者は、手塩にかけてつくった生産物に誇りを持っている。したがって、消費者には生産物を「うちのウニ」「うちのホ

タテ」として味わってもらう時が特に嬉しい。我が家では、普段は市場に出荷しているため消費者の顔を直接見ることはないが、家に来客があった際にウニやホタテを振る舞うこともある。その時、おいしそうに食べているお客さんを見ると嬉しい。消費者に喜んでもらうことは、生産者のモチベーションにもつながる。スーパーマーケットなどの直売コーナーに、生産者の顔や名前が分かる商品が販売されているが、逆に消費者の声が生産者に届く仕組みも充実しているといいのではないかと思う。

また、農業や水産業は地産地消に密接な関連がある。そこでしか食べられないもの、新鮮だからこそのおいしさは、その地域に足を運ぶ目的になり、交流人口拡大のメリットもあると考える。生産者にとっても、消費者が食べる様子を見ることができるとなる。

農業・水産業が衰退すれば、その地域ならではの食も失われてしまうだろう。生産者は「最高の食」をめざして日々働いている。消費者にもぜひ、生産者の努力に思いを馳せていただきたい。

北海道職員と食の関わり方について

赤司 寧乃（北海道総合政策部統計課）

北海道胆振東部地震に関わる「食」について、消費者である視点と北海道職員である視点から述べる。北海道胆振東部地震とは、平成30年9月6日に北海道胆振地方中等部で発生した地震のことであり、そのマグニチュードは6.7であった。その影響は大きく、地震発生直後は北海道全域が停電状態となり、44市町村において断水が発生した。また、地震発生後には道内観光地で大量のキャンセルが発生し、食・観光産業にも大きな影響があった。地震発生の翌日から道は被害が大きかった市町村に職員を派遣し、避難所の運営等を行った。食に関わる支援としては、自衛隊やボランティアによる配給があり、道職員はその配給作業の手伝いをするこももあった。市町村職員と道民やボランティアの方の間に入り、調整する役割もあったという。消費者の意識としては、非常時に備えようとする意識が高まり、飲料水や缶詰、カップラーメンなどの商品が売れ、地震発生後数日間には手に入りにくい状況であった。北海道では北海道胆振東部地震からの復旧・復興対策の4つの柱を立てており、その1つが「食と観光の早急な需要回復」である。「食」は大事な観光資源であるため、国内外における道産食品や北海道への観光客の誘致に向けたプロモーションを行っている。生産地が安全で、そこに住む人々も元気に生活しているということをアピールする動きもみられる。以上のことから、道職員としてはただの消費者という立場だけではなく、消費者と生産者の間を繋ぐ役割があると考えられる。

高齢者の食事の注意と工夫

佐々木 京介（株式会社くるみの家 デイサービスくるみの家管理者兼生活相談員）

介助を必要としている高齢者にとって食事は困難な行為である。その困難さを招く要因として、加齢や病気による味覚・咀嚼・嚥下の3つの身体機能の低下が挙げられる。まず味